

## 東日本大震災後の一視点 —学業復帰した被災地学生にとっての三ヶ月—

○山本玲子\*、守山正樹\*\*、永幡幸司\*\*\*

\*尚綱学院大学総合人間科学部、\*\*福岡大学医学部、\*\*\*福島大学理工学群

### 【はじめに】

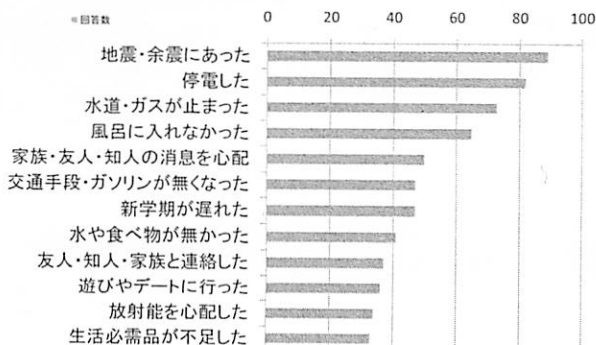
2011年3月11日、東日本大震災により多くのものが失われ、日常生活に大きな変化をもたらした。宮城県S大学でも、入学式・授業開始は1ヶ月遅れた。学生たちがどのような思いで被災後の日々を生きたかを、学生自身で確認することは、今後のよりよい学生生活のためのケアを考える上でも重要である。

嫌さ度と嬉しさ度の2次元展開を行う自記生活マップ調査は、雲仙普賢岳の噴火災害<sup>1)</sup>、阪神淡路大震災<sup>2)</sup>、新潟県中越地震<sup>3)</sup>において、小学生による災害体験の振り返りに用いられ、同時に、災害後の支援活動のニーズ掘り起こしに役立ってきた。この方法を用い、震災後の3ヶ月の生活について学生の視点で、震災直後から日常生活に戻る過程を振り返ることで何を見出したかを明らかにする。

### 【対象及び方法】

宮城県S大学5月11日から学業復帰した学生に対し調査票とその研究目的の説明を行い、同意を得た106人の自記生活マップ(6月15日記入)を対象とした。有効回答率は98.1%。有効回答者103(男23、女80、1年生71人、2-4年生32人)。自記生活マップは2次元イメージ展開法と呼ばれるワークショップの手法を応用した調査票<sup>4)</sup>である。震災後の生活で体験したと考えられる37種類の出来事と空欄(自分で印象的なことを書き加える欄)からなるキーワード欄から、特に印象的な出来事を表すものを10以内で選択。それらを体験の「いや」な順にならべ、さらにその項目を「うれしい」という観点から5段階評価し、2次元座標平面上に展開することで、生活のイメージマップを作成した。

### 【結果および考察】

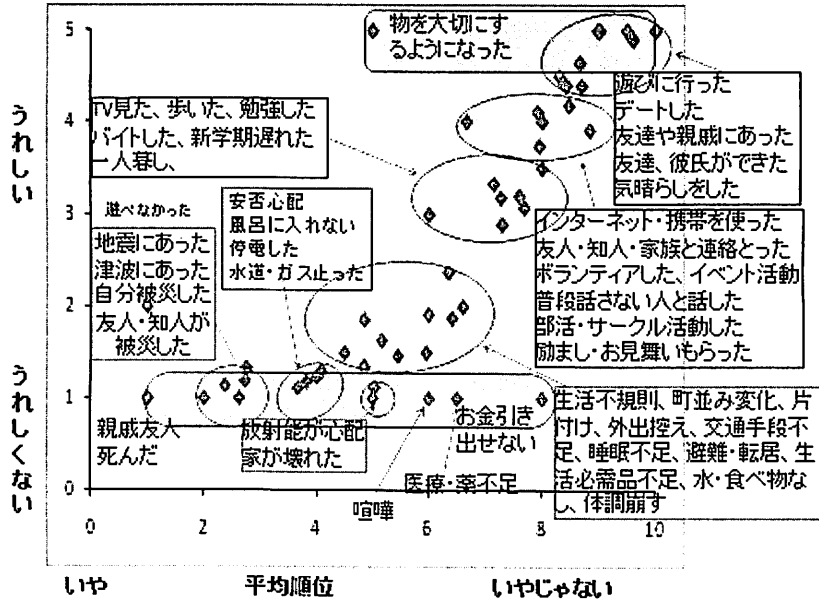


特に印象深かった出来事：選ばれた10項目でのべ選択頻度の高かった出来事(図1)は、地震とその結果としての生活変化が強烈だっただけでなく、親族・知己とのつながり、見えない放射能汚染への心配、復旧に転じてからの友人や恋人とのデートや遊びの喜びが大きかった事を示した。しかし、被災していても印象的出来事に選ば

なかったものも多かった。気づきの自由記載によれば、死んだり・家を失ったり、職をなくした人に比べれば・・・との思いからであった。「いや」と「うれしい」の関係：キーワードとして挙げられた項目の嫌な順位(1-10)、うれしい度(1-5)の平均値を出してプロットした(図2)。もっともうれしくなかったとして津波、友人・親戚の死が、また、件数は少

なく嫌なこととしての順位も低かったが、医療・薬の不足、家が壊れた、預金引出しできないなど耐えればしのげるとはいえない切羽詰った状況が挙げられた。風呂、水・食べ物、生活必需品、交通手段、体調、睡眠など自己の生活の不便・

体調などはやや遠慮気味に位置づけられた。震災後、間もない時期には、歩いた、バイトした、普段話さない人と話した、など平常より広がりのある経験をしていた。少数だが、災害を契機として摂食障害に陥ったものが出た。「いや」と「うれしい」パターンからの生活イメージ: 印象深い事として選んだ10項目中、嬉しい



深い事として選んだ10項目中、嬉しい

くない事の個数を全部と答えたのは4%、**図2 印象深い出来事と気持ち** 7項目以上とすると29%、5項目以上が64%、4項目以上では実に80%に上った。また、うれしかったことは1つもなかった者は22%。うれしかったこと4つ挙げたのは1%、3つ以上14%、2つ以上49%、1つだけは29%。嫌な出来事と嬉しい出来事をプロットした生活イメージマップでは必ずしも直線的相関を示さなかった。2峰性もあった。多様だが、自由記載とマップパターンから学生はウェルビーイングを志向しているようであるとの知見が得られた。3ヶ月目はまだ無意識の狂騒の雰囲気、学生が例年より饒舌であった。高揚した勉強意欲・気力・体力が持続するか、体調不良や健康障害を抱えながら大学に出てきている学生が、このまま巧く心身ともに健康を維持していけるか、安心・安全な社会に生きているという認識を持って生活していけるか。これらの疑問に答えるためにも個々の受止めパターンがどのように変化するか観察することが今後の課題である。

**【参考文献】**

- 1) 横尾美智代, 守山正樹: 「私のくらしとふんか一雲仙普賢岳の噴火災害を体験した小学生の気持ち」; 長崎大学医学部衛生学教室(1996)
- 2) 守山正樹ら: 「阪神淡路大震災から感じたこと考えたこと 神戸大学発達科学部附属明石小学校2・4-6年生の場合」; 長崎大学医学部衛生学教室(1996)
- 3) 永幡幸司ら: 新潟県中越地震で被災した児童による避難生活で体験した出来事の評価; 厚生生の指標, Vol. 55 (No. 4), pp. 26-33 (2008)
- 4) 守山正樹, 松原伸一: 食のイメージ・マッピングによる栄養教育場面での思考と対話の支援; 栄養学雑誌, Vol. 54, pp. 47-57 (1996)